

古墳壁画を描いた人々

黄泉・恐怖・呪術 光岡明

(熊本近代文学館館長)



チブサン古墳(外観)

これまでの五回は、具体的な個人、集団をとり上げてきました。最終の今回は、一挙に古代にさかのぼるついでに、名前もわからぬ、しかし確実に存在したに違いない「古代の絵師たち」をとり上げます。

古代の豪族は死ぬと古墳を造りました。全国にたくさんある古墳のなかで、五世紀の後半から七世紀前半までの古墳のうち、内部に文様や絵が描かれたものがあります。装飾古墳と呼ばれますが、この装飾古墳は実は福岡県南部から熊本県北部にかけて密集しています。私たち熊本県民のはるかな祖先に「死を描いた絵師たち」がいたのです。

私は装飾古墳を「死のリビングルーム」と呼んだことがあります。くぐり口である羨道(けんどう)を四つばいになって古墳のなかに入ると、高い天井のある玄室(げんしつ)という死体を安置した場所に行きつきます。その内部に文様を描かれています。古墳はいうまでもなく墓です。墓の内

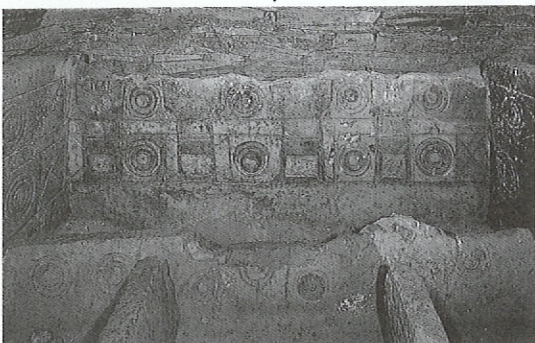
井寺古墳(上益城郡嘉島町)



気持ちになったことを記憶しています。文様は時代が下がるにつれて、絵に近づいてくわけですが、それは文様に寄せる古代人のメッセージ量が増える、とういことでしょう。

熊本市小島下町の千金甲一号古墳は、見事な円文と穀と言われる文様のつらなりです。ペンガラが基盤の石に塗りこんであって、雨の日などはこの赤色がぬらぬらと輝きます。円文は太陽とか鏡を現すとされていますが、もちろん確かなことはわかりません。しかし、明らかに直弧文の静かさとは違います。死が目を見開いて、目ざめているような気がします。同じ円文でも、福岡県吉井町の日の岡古墳と比べてみるのもいいでしょう。千金甲古墳の方が底籠(そこご)っています。

また、絵画系に近いものでは、山鹿市のチブサン古墳があります。このなかで、



千金甲1号(甲号)古墳(熊本市小島下町)



チブサン古墳(山鹿市城西福寺)



弁慶が穴古墳(山鹿市熊入)舟にのった鳥・馬

部に入るので怖いです。だれでも「古事記」のなかに出てくるイザナギが死んだイザナミを黄泉(よみ)の国に追いかけていき、そこで腐乱したイザナミの死体を見て逃げ帰ろうとして、怒ったイザナミに追いかけるという神話を思い出すはず。イザナギは間に千引き岩を立て、イザナミと絶縁するのですが、古墳のなかにはまさに死穢(しじ)にまみれたイザナミが充滿しているような感じがします。

「死のリビングルーム」という所以です。そういう怖い死、追いかけてきてとりつかせられない死を、古代人はなんとかしてなだめようとした、あるいは古墳のなかには愛する人、部族にとって非常に大切な人に、蘇(よみがえ)ってほしいと願ったのでしよう。装飾文様にはそういう「呪的な意味」がこめられている、というのが一般的な学説です。

その文様は、初期の幾何文様から後期の絵画系文様へと変化していく、と言われまは、お化けとか不気味な仮面を想像させますし、黒点を持つ二つの円文が目、下の黒い三角文は瘴気(じょうき)を吐くかと思われ、さらに全面真っ赤に塗られた石壁には、七つの円文の下に両手を上げ、冠をかぶった人物と思われる像があります。さらに、同市にある弁慶ヶ穴古墳(べんけいがけ)になりますと、明らかに舟、馬とわかる絵があります。

絵画系古墳は福岡県桂川町の王塚古墳、同県吉井町の珍敷塚古墳(ちんぢくづか)のように、またまってはっきりしたイメージを持つもののように、熊本の装飾文様は発達していません。私見でなんの権威もない感想ですが、肥後では大和朝廷に対抗した磐井(いわた)のような豪族がいなかった、あるいは火の君のように早くから大和朝廷に組み

れています。幾何文様の典型は、上益城郡嘉島町の井寺古墳でしょう。その文様は直弧文と呼ばれます。文章で説明するのはむづかしく、写真でご覧になって下さい。強いて言えば、斜め十字に交差する直線に五線からなる帯状弧線が渦巻きのよう巻きついた、とても言いましようか。この直弧文にもパターンがあって、A型、B型、C型(あるいは鍵手文)とわかれ、接続型、反転型と色々な組み合わせで出現します。

個人的な感想で恐縮ですが、私はこの直弧文がいちばん好きです。理不盡(りふじん)で、どんな現世的力がある人間でも立ち向かうことができな死に対して、古代人が一生懸命に考え、呪的な文様で読み解こうとしたものだ、と思うからです。私は井寺古墳のなかに、ひとりで一時間ぐらい坐っていたことがあります。そのとき「直弧文は哲学的、神学的な顔つきをしるな」と思いました。たいへん静かな

こまれていたことと関係があるのでしよう。

考古学、歴史を勉強するかわら、私たちは私たちの祖先が描いた「死のかたち」を見て回るのもおもしろいと思いませんか。いかに現代でも、死がわかっていないはずはありません。むしろ古代の方が真剣に死を考えていたと言えるかもしれません。

絵画系文様の発展は、確かに葬られた人の現世的な権力や豪奢な生活を背後に予想させますが、初心は幾何文様にあるでしょう。熊本県はいま装飾古墳館を風土記の丘に建設中です。レプリカですが、いまほとんどの古墳は立入り禁止ですから、貴重な展覧になるはずです。みなさんその前で「死」を考えてみられたらいかがでしょう。